



## 第10回定期総会にあたって

小西 厚子

東日本大震災と福島第一原発事故、テレビに映し出される衝撃的な光景に心を奪われながら過ごしている毎日が続いています。3月11日の大地震津波に命を奪われた方々のご冥福をお祈りいたします。また、被災された方々にお見舞い申し上げます。恐らく会員の皆様の中にもお身内や知人に被災された方がいられるのではないかと、そのご心痛いかばかりかと思ひ煩らうばかりです。

第10回定期総会においては、昨年度・平成22年度の活動報告をしなければなりません。平成22年12月23日発行の会報「通信13号」に、年末までの活動は報告しています。そして、前年度・第9回定期総会において、平成22年度の活動については、市長と市議会に提出した『陳情(書)』の結果の方向を見守りながら、考える会が実現したい「ホスピスケアの核となる施設」の開設を発信していくことを出席会員の皆様にご了承いただいた、とお伝えしています。

この『陳情書』がどのように取り上げられるか、会員や署名者の皆様と共に、期待をこめて見守っていましたが、平成23年4月1日の『広報ふちゅう』に発表された平成23年度市政の運営方針には、取り上げられていませんでした。

役員会としては『陳情書』を提出してから何もしていなかったわけではなく、この件に関する市政の担当部署である福祉保健部長に伺ったり、会員になられている市議会議員の方々にご協力をお願いしたりしていました。ただし、なかなかよい結果には至らずに年を越してしまいました。

『陳情書』を提出後、多くの市民の皆様、とくに『陳情書』に署名を寄せられた方々から、「ホスピス」・「ホスピスケアの核となる施設」はどうなったのか、との声が寄せられていました。

そこで、会員を含む署名者9,613名の皆様のお思いにお応えするために、また、第10回定期総会に会員の皆様にご報告をするために、4月15日付で野口市長宛てに『陳情書』に関するお願いをしたいと面会を申し込みました。ただし、市長には新年度のお忙しい公務と市議会議員選挙の直前であったためご都合悪くて、4月22日に役員4名が、福祉保健部・部長、次長、地域福祉推進課長と職員2名の皆様と面談の機会を持ちました。

この面談で、当会の『陳情書』についての市の見解骨子は、「趣旨は良いことと理解しているが、具体的な話(計画)が出れば市として対応できる。ただし、公設公営の施設の開設は、市としては難しい。(文責筆者)」ということでした。

市に対応していただくために、どう進めてゆくかが、「考える会」の今年度の活動課題であると思います。

役員会では、会員の皆様と共に、私たちの「ホスピスケアの核となる施設」の実現を具体的にする計画を見出せるよう努力したいと考えています。

さて、本日、定期総会に先立つ第29回勉強会・講演会は、講師にながた内科クリニック院長永田宏先生をお迎えして、『ターミナルケアの現状と問題点』についてお話を伺うことになりました。ながた内科クリニックは、在宅療養支援診療所を併設されていて、在宅ターミナルケアの対応をなさっていられるとのことで、府中市における在宅医療を担われていらっしゃる永田先生に、先生のご経験を伺えること、またお忙しい中、講師をお引き受けいただきましたことを感謝申し上げます。

「通信第14号」は、前号でご紹介できなかった第27回勉強会の内容を中心に編集しました。

## 第27回勉強会の要約

日時 平成22年8月22日(日) 午後1時30分～3時30分

場所 片町文化センター 3階講堂

演題 在宅緩和ケア「いつでも・どこでも・どんな病気でも、きれめのない緩和ケア」のために

講師 永山 淳氏： 在宅療養支援診療所 ピースクリニック中井 院長

## 講演概要

## 1. 「緩和ケア」とは？

## (1) 緩和ケアの概念と歴史の変遷

1950年代＝ターミナルケア

アメリカ・イギリスでは、人が死に向かってゆく過程を理解し、医療に加えて人間的な対応をすること。

1960年代＝ホスピスケア

イギリスでは、死に行く人への全人的アプローチ。「ホスピタリティ＝もてなし」の心によるケア。

カナダでは、人の死に向かう過程に焦点をあて、積極的なケアを提供すること。

1990年代＝エンド・オブ・ライフ・ケア

アメリカ・カナダでは、がんのみならず、高齢者や根治が難しい難病などさまざまな疾患の死への過程を対象としたケア。 以上のような概念の変遷がある。



## (2) 緩和ケアが提供される時期

あなたが、治る見込みがなく死期が迫っている（余命が半年以下）と告げられた場合。

1. あなたはどこで療養したいですか？

2. 最期をどこで迎えたいですか？

a. 緩和ケア病棟    b. 自宅    c. これまで通った病院    d. がんセンター

## 2. 患者さんの苦痛とチームアプローチ

## (1) 患者さんが感じる苦痛とは？

- a. 病気に伴う苦痛    b. 病気の作りだす環境によって生じる苦痛  
c. 治療そのものや副作用によって生じる苦痛    d. 病気とは関係のない苦痛  
e. 苦痛自体によって生じる新たな苦痛

## (2) 患者さんの病気の苦痛

- a. 痛み    b. 痛み以外の身体症状    c. がんと関係があるもの・ないもの  
d. 手術・化学療法など治療による苦痛    e. リンパ浮腫（解決しづらいむくみ）

## 3. 緩和ケアが提供される時期と場所

緩和ケアは時期や場所を選ばず提供される。

a. 患者さんやご家族が大切にしたいと思うことには、さまざまなことがある

b. 緩和ケアは患者さんとご家族の「苦痛」に焦点をあてる

c. 苦痛はさまざまな側面から「全人的」に捉える必要がある

こうした観点から、さまざまな職種・立場の人間の力を集めた「チームアプローチ」が重要。

緩和ケアとは、苦痛を包括的に評価してそれを和らげ、個々が大切にしたいと願う価値観を尊重しつつ、患者さんと家族の生活の質を高める医療である。

## 4. 在宅医療の実際—当クリニック、ピースクリニック中井・訪問看護ステーション中井の経験から

a. 県西部の地域ケア・緩和ケアを支える

b. クリニックの所在地と診療圏

c. 訪問診療を受けている(た)患者さんの分布

d. 在宅で使える医療機器

(1) 訪問診療実績 (2010.4.1～7.31)

- a. 患者総数 44
  - b. 年齢 7-99 (中央値 70), 成人 : 小児 = 41 : 3
  - c. がん : 非がん = 33 : 11 (多い?)
  - d. 在宅での看取り 13例
  - e. 緩和ケア病棟への紹介 11例
- (2) 診療内容
- a. 在宅人工呼吸, 在宅酸素療法, 在宅静脈栄養
  - b. 気管カニューレ交換, 胃ろう交換, 腹腔穿刺
  - c. 在宅での疼痛緩和 (モルヒネ持続投与など)
- (3) 在宅療養における家族
- a. 家族は最高・最強の介護者
  - b. いかに関係を支援し力を引き出していか
  - c. 24時間, 365日の介護を強いられる
  - d. 介護疲れがケアの質の低下, 家族内のストレスとなる
  - e. 急病, 法事, 仕事, 行事...身動きがとれない
  - f. 適切なレスパイトケアが鍵となるが...
  - g. 引き受け可能な施設が少ない
  - h. 緩和ケア病棟, ショートステイ, 病院...
- (4) 全ての疾患において...医療機関の連携を
- a. 緩和ケアはがんの終末期の患者さんだけを対象とするものではない
  - b. 緩和ケアは時期と場所を選ばず提供されることが望ましい
  - c. 患者さん・ご家族が感じる苦痛にはさまざまなものがある
  - d. 緩和ケアは苦痛に焦点を当てて評価しそれを和らげることで, 生活の質を高める医療である
  - e. 在宅医療は, 患者さん・ご家族の生活に一番近く, 緩和ケアの一つの重要なかたちだと考えられる
  - f. 患者さんと家族を中心にした緩和ケアの連携ネットワークづくりが必要である

本日の講演内容や緩和ケアに関する相談などあれば, ピースクリニック中井 永山までご連絡ください  
 Tel. 0465-81-3900 : Fax. 0465-81-3910 : E-mail. nagayama@ny.airnet.ne.jp  
 HP: <http://www.peaceclinicnakai.jp/>

文責編集委員

## Nさんの場合のがん死

駒ヶ嶺泰秀

過ぐる2月, 府中に住んでおられたNさんが亡くなられた。亡くなられたのは, 今, 死亡原因の一番多いがん死でした。

2年前, 当「府中ホスピスを考える会」が市長宛に『陳情書』への署名活動をした折りに, 彼女は積極的に協力してくれて, 一人で360余名の署名を集めて下さいました。

そのNさんが, 昨年11月のある夜, 電話をして来られ, 「わたし, がんになってしまいました。それで, 桜町病院のホスピスについて教えて頂きたいと思って」とのこと。聞きましたところでは, もう既に手遅れの状態で, ご本人が言うには, 「手術も抗がん剤も放射線治療も全て断って, 残りの命をホスピスに預けて, 残りの時間を大切に生きたい。死んだら, 献体して医学のために役立てたい」とのこと。私の持っている情報をお知らせした。間もなく, 桜町病院の外科に入院された。お見舞いに行った時, 時折涙ぐまれたが, 気丈を保って, 帰りを病室の出口まで見送って下さった。

次に, 年明けに, 桜町病院のホスピスの遺族会の会に出た折に見舞いましたが, ホスピス棟に移っておられ, 看護師の話では, 「今眠っておられるので面会は出来ません」ということだった。それから数日後, 息子さんから亡くなられた旨, 電話で知らされた。

十数年前には, ご主人がやはりがんで亡くなられている。そのご主人の亡くなられ方を, そっくり奥さんも見習っての死の迎え方だったようです。

府中にも, ホスピス兼緩和ケア施設がやはり是非ほしいと思う。



## 府中ホスピスを考える会講座実施歴

日付	テーマ	講師	(敬称略)
特01/10/28	がんと向きあったとき、あなたならどう生きていきますか	聖路加国際病院名譽理事長	日野原 重明
1 02/02/17	「ホスピスの体験から」	ピースハウス病院ナース	杉本 真由美
2 02/04/28	「在宅ホスピスケアについて」	ピースハウス病院ナース	杉本 真由美
3 02/07/14	「緩和ケアで使われる薬について」	薬剤師(元ピースハウス病院職員)	玉井 照枝
特02/10/11	アサヒタウンズ特別講演会「日野原先生」		
4 02/11/24	「心と身体の痛みを癒すには」	くらしき作陽大学教授	篠田 知璋
5 03/05/18	地域に密着した在宅ケアについて	平林医院院長	平林 竹一
6 03/06/10	ホスピスセミナー	桜町聖ヨハネホスピスケア研究所長	山崎 章郎
7 03/08/03	「ヨーロッパのホスピス事情」	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
8 03/10/26	家で最期をむかえるために-在宅ホスピスケアの実際	ホームケアクリニック川越院長	川越 厚
9 04/04/18	「家族の立場からホスピスケアを見る」	府中ホスピスを考える会会員	駒ヶ嶺 泰秀
10 04/09/10	輝いて生きる-人生の後半を-	聖路加国際病院名譽理事長	日野原 重明
11 04/11/07	コミュニティで考えるこれからのホスピスケア	聖ヨハネホスピスケア研究所研究員	長谷 方人
12 05/06/05	夫をガンで見送って-入院治療3ヶ月後の不安-	府中ホスピスを考える会会員	森山 レイ子
特05/09/24	地域で生きる-尊厳ある生と死を求めて	聖ヨハネホスピスケア研究所長	山崎 章郎 他
特05/10/30	いのちと響き合う絵本	ノンフィクション作家	柳田 邦男
13 05/11/26	更年期障害と子宮癌	東府中病院長	十蔵寺 新
14 06/03/26	人間のいのちと死-終末期医療からみる	医学博士・医療法人恵風会施設長	渡邊 寛直
15 06/05/21	千倉市『花の谷』(ホスピス)の紹介	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
16 06/08/20	NHKビデオによるホスピスに関する Q&A	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
特06/09/09	永六輔 いのちを語る	ケアタウン小平・聖ヨハネホスピスケア研究所共催	
17 06/11/11	ときめく「命(いのち)」をいきる	青山学院大学講師	野村 祐之
18 07/04/01	さいごまで生きる施設-ホスピス-でのとき	ライフプランニングセンター所長	平野 真澄
19 07/06/24	「いのち輝かせて生きる」-こどもから老人まで	聖路加国際病院名譽理事長	日野原 重明
特07/10/13	鎌田実 いのちを語る	ケアタウン小平・聖ヨハネホスピスケア研究所共催	
20 08/01/20	「地域におけるホスピスケア」-患者と家族の心を支える-	医療法人社団イバラキ会	高野 和也
21 08/05/25	「ホスピスケアにおける訪問看護の役割」	医王訪問看護ステーション地域専門看護師	宮田 乃有
22 08/08/03	阿伎留医療センター緩和ケア病棟の現状	公立阿伎留医療センター緩和ケア科・医師	戸澤 育文
23 09/01/25	ビデオによる「ホスピス緩和ケアの歩み」	府中ホスピスを考える会副会長	市村 晴子
24 09/05/17	府中市における訪問看護ステーションの現状	府中市医師会訪問看護ステーション所長	芝尾 幾世
25 09/11/15	ホスピスケアの核となる施設の実現に向けて	ボランティアまつりパネルディスカッション	会の役員
26 10/05/02	府中でも実現したい 地域で 家庭で ホスピス・緩和ケアを	ケアタウン小平クリニック院長 聖路加国際病院理事長	山崎 章郎 日野原 重明
27 10/08/22	在宅緩和ケア「いつでも…緩和ケア」のために	ピースクリニック中井院長	永山 淳
28 10/11/28	府中で「ホスピス」を実現したい	府中 NPO・ボランティアまつり	会の役員
29 10/05/22	ターミナルケアの現状と問題点	ながた内科クリニック院長	永田 宏

会計より会員の皆様へのご願い 会費の払い込みをどうぞよろしくお願いいたします。勉強会・講演会等当日でも、郵便局への振込でも結構です。振込用紙ご入用の方は、会計までご連絡いただければお送りいたします。

会計 宇田ひさ子 042-363-9271

編集後記 平成23年ももう少しで半分終えることとなります。今年の冬は寒さが続き、漸く春が近づいたと思ったら、3.11の1000年に一度の大地震と巨大津波の襲来、そして原発の事故、追い打ちをかけるような寒波、日本は一体どうなるのかと先々が心配される梅雨入り前の五月。「考える会」も曲がり角に来ているのかもしれない。

「通信」編集委員 小西、荒川、駒ヶ嶺、和田